たちばなじつざん
立花実山

1655年－1708年

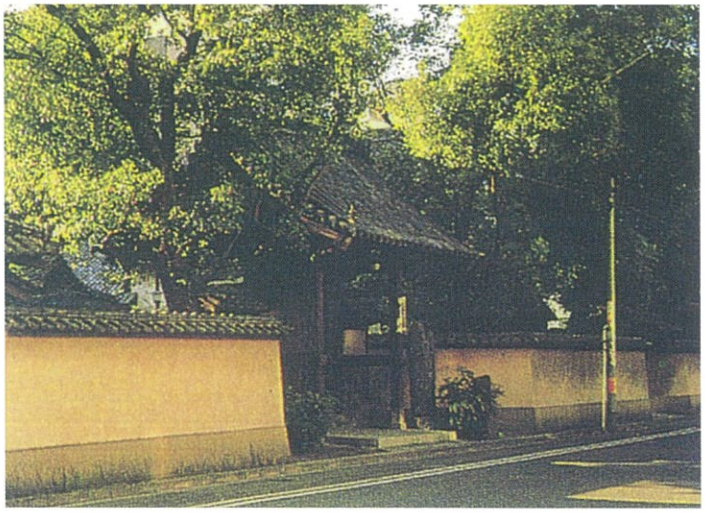
実山は薦野（立花）増時の孫で、平左衛門重種の二男、名は重根、実山は号です。数え歳８つの時から黒田の第３代藩主、光之に近仕し重用されてついに3000石の大身（高位・高禄）となりました。

晴雲寺（飯塚市鯰田）

当時随一の器量人と称せられ、光之の文治主義体制を支え、その推進につとめました。

光之は４代綱政に藩主の座を譲った後も、綱政の意のままにはさせませんでした。そういう状況下で実山は光之の死まで側近として実に47年を過ごしたのです。

光之の死後継嗣をめぐる綱之（廃嫡された綱政の兄）騒動にまきこまれ、１周忌がすむと実山は野村家に預けられ、ついで鯰田（飯塚市）に幽閉され宝永５年（1708）11月10日、ついに非業の死を遂げました。時に実山54歳、光之の死後１年半のことでした。遺骸は密かに鯰田の晴雲寺境内に葬られました。それから41年後、６代藩主継高は福岡市の東林寺へ遺骸を移して供養しました。



東林寺（福岡市博多区住吉）

実山は鯰田幽閉中に日記「梵字艸」などを著わしています。極限の状況下での労作です。その非凡さがうかがわれます。

また光之の世の終わりを予感し、自身や一族の将来を憂慮して、従弟の増能（ますよし）に『薦野家譜』を編集させ、自ら序文を書いています。また自身も系図を整理して『丹墀姓薦野氏系』（たじひせい）をまとめました。

実山は側近としての繁忙な中で、いろいろの労作をのこしていますが、彼の生涯で最大のものは『南方録』（なんぽうろく）です。

『南方録』は、千利休の侘茶を詳述する茶の湯伝書七巻、元禄３年（1690）に成立しましたが、その過程には諸説があります。

南方流の茶道は武家の間で流行し、現在でもまた福岡市で盛んになっています。

実山の父、重種は延宝（えんぽう）６年（1678）の鷹狩りの時に薦野の別邸に光之を案内しています。立花家は薦野とは幕末まで緊密に結ばれており、実山の位牌が薦野の清瀧寺（せいりゅうじ）に残っています。

実山の位牌（清瀧寺）

実山の墓（東林寺境内）

実山の筆蹟